

水野 昇・岩堀修明・中村泰尚 訳

図説 中枢神経系 第2版

(A4判 426頁 11,330円(税込) 1991年 医学書院刊)

柳沢 信夫

(信州大学医学部第3内科)

神経系の臨床家にとって優れた解剖学書は常に座右におく大切なものである。特に近年 MRI 等の画像技術の進歩により中枢神経の詳細な構造の知識が研修医にも求められ、また大脳高次機能や運動機能、さらに自律神経機能の中脳の局在や線維連絡が神経症状の理解や臨床研究に一層必要になった状況では、マクロの構造、血管支配、線維連絡、臨床と病理の対応が最新の知見に基づいて整理された教科書の必要度が高い。古くは Brodal, Carpenter の解剖学書, Rasmussen の神経経路の単行書が各々の時代の要求にマッチしたものであった。現在は Nieuwenhuys らの本書が最も優れた解剖学書として高い評価を得てきている。今回、本文と図版数を 1.5～2.5 倍に増やし、新たなカラー頁を加え、さらに 1,500 点以上の文献を収載して改訂された第 2 版(原著第 3 版)は、その評価を一層高める素晴らしい教科書となった。

本書は 1. 脳と脊髄の肉眼解剖, 2. 中枢神経系の血管・髄膜・くも膜下腔の肉眼解剖, 3. 脳の切断面の観察, 4. 切片標本の顕微

鏡的観察, 5. 機能系, の 5 部に分かれている。1 部から 4 部は脳を学ぶ臨床家にとって最も知りたい脳の立体構造、血管系、神経核や遠心・求心路が丁寧に、しかも重要な部分を強調して記載されている。立体構造では線条体と視床の関係や海馬の全脳における位置付けなど長年神経の臨床に携わった者にも、なるほどとうなずける明快な提示がなされている。血管系では脳幹、脊髄の血管支配、くも膜下腔や静脈叢の構造が臨床との関連でよく示されているのが印象的である。切片標本の微細構造は左に神経細胞、右に線維という古典的な記載法に従って示されているが、標本を拡大投射してトレースする技法を用いるために、具体的な細胞の形状がよくわかり、顕微鏡をのぞいて部位を同定する苦勞を大いに減らしてくれると思われる。特に重要な核群が入りこんで存在する脳幹については、相互の核の線維結合や脳神経の走行が模式図で丁寧に示されている。

本書の 1/2 以上を占める第 5 部機能系は、中枢神経機能と構造との対比を学ぶ上で本書ならではの

重厚な内容をもち、各機能を支える神経構造と線維連絡、神経伝達物質が詳述されている。この部はおそらく著者が最も重点をおいて記述したであろうことがうかがえる。特殊感覚系の明快な記述は臨床家には至れりつくせりのものである。一方、線条体や辺縁系の記述は大部にわたり、通読すると焦点を見失い戸惑うほどである。この部分は必要に応じてあたるべきであろう。

現代のように、脳科学が急速に発展し、自然科学の中で大きな広がりをもつ時代にふさわしい脳の textbook には、専門的な知識に加えて、平板ではなく重要さにアクセントをつけた記述が望まれる。私は 1976 年、オランダ Leiden における運動障害のシンポジウムで Nieuwenhuys の話を聴き魅了された。若い人たちは 1 冊の専門書から将来を左右する大きな影響を受ける。本書はまさにそのような本の一つであろう。

水野昇氏らの翻訳は、自然な日本語に訳出することに意を用い、本来の用語に加えてなじみの深い人名を冠した解剖用語を追加記載したり、また適切な註を随所に入れるなど工夫をこらし、読みやすくできている。

原著の素晴らしさにより訳者を得て、本書の新しい第 2 版は神経を勉強する臨床家、基礎学者がともに座右におくべき書となろう。